

ポリポット植え ヤマユリ幼苗の育て方

この度は、ヤマユリ実生苗*の“里親”となって育てて頂けることになり有難うございます。

*実生苗（みしょうなえ）：種から育てた苗

日本固有種であるヤマユリは、野生のユリの中でも最も豪華な花を咲かせます。種から地上に芽を出すまでに1年半、更に花を咲かせるまで育つするには、最低でも4～5年掛かります。 ◎右の写真は芽出し後、1年目



自然環境の中では、生育期間中の気候・環境の影響や病虫害などで自然淘汰され、地上に落ちた種が花を咲かせるまで育つ確率は千に一つとも言われています。 また特に病虫害に弱く、生息地を選び、育てるのが難しく手間のかかるヤマユリとも言われますが、本来 里山等で育つ、山野草であるヤマユリの特性を知り、幾つかの育成上の注意点を守れば、全く初めての方でも花を咲かせるまで育てることが可能です。

あせらずに気長に適切な管理を心掛けて、是非 花を咲かせるまで育ててみてください。

ヤマユリの生育の特徴と育成上の注意点

ヤマユリが好む環境は 午前中は日が当たり午後には日陰となるような半日陰で、風通しが良く、有機質に富み 排水性と保水性に優れ、湿度が保たれた 弱酸性(PH5.5～6.5)の土壌で、気温 18～20℃のやや涼しく感じられる場所です。

ヤマユリにとって 冬の寒さは休眠打破に、そして夏の暑さは球根充実のきっかけとして必要です。

- ◆**特に強い日差し、高温、乾燥には非常に弱い**ので、直接日光が当たらないような木陰や庇の下に置くとか、寒冷紗や不織布等で強い日差しを遮るようにします。
- ◆**過湿にも弱い**ので、土の表面が乾いていても、指を差し込んでみて少し湿気を感じられる程度の環境で育てます。 水遣り時には 鉢の底穴から水が流れ出る程度にタップリと遣るようにします。

※特に地上部が無くなる冬の休眠期でも、地中の球根は生きているので適度な湿り気を保つ必要が有ります。

- ◆鉢植えの培養土の表面を腐葉土等で覆うと、夏は乾燥／遮熱対策となり、冬は凍結（霜柱）防止対策になります。（ヤマユリは寒さには強いのですが、水切れすると枯死します）
- ◆排水性を考慮して 鉢は直接地面の上に置かず、レンガやタル木、スノコ等に乗せるようにします。 地面から離し葉や茎への泥はねを防ぐことは病気対策としても有効です。
- ◆培養土中の腐葉土が 唯一の栄養分となるので、特に施肥の必要はありませんが、養分不足等で施肥が必要となる場合、液肥を通常の倍くらいに薄めて水代わりに遣ります。
- ◆**病虫害には特に弱い**ので、事前予防として 殺菌剤や殺虫剤（混合液にしても良い）を適宜散布*します。（特にアブラムシは樹液を吸うだけでなく、ウィルスを媒介させます）
薬剤使用をなるべく控えたい場合、虫よけ忌避剤として木酢液等の使用もお勧めです。
一旦、病気にかった苗は治せません。他のヤマユリに病気をうつさないように、根周りの土ごと掘り上げて完全撤去・焼却処分します。（枯れてもウィルスは残存します）
***発芽時、梅雨時、夏季明け時は要注意時期**です。 ※状況を見ながら薬剤を散布
- ◆ヤマユリの苗ごとの生育状況には かなりばらつきが見られます。

ポリポット植えヤマユリ幼苗の育成

《持ち帰ったら、直ぐにやって頂きたいこと》



ポリポット鉢は薄く、実生苗の根張りも弱くて 外部環境の影響を受けやすいので、ポリポットのまま 一回り以上サイズの大きい鉢（5号*以上）にスッポリと入れるようにします。《**二重鉢**》

*1号(寸)がほぼ3cmなので、5号鉢は口径15cmです。
外鉢の材質として 断熱・通気効果のある素焼きの鉢が最適ですが、プラスチック製でも構いません。 又、外鉢と内鉢の間は空隙のままでも良いのですが、赤玉土（小粒）を詰めるとより効果的です。 また二重鉢にする際には、重ねた鉢底の水抜け穴が塞がれないように注意します。 ◎上の写真は芽出し後、2年目の苗で1年目より大きな一枚葉となります。

《ポットの置き場所、置き方》

ヤマユリは強い日差しや暑さに特に弱いので、家の東側など 午前中だけ日が当たる場所や 明るい日陰で風通しの良い処に置きます。 南向き等で日当たりが強い場合は 寒冷紗等の覆いをかけて日差しを調節するようにします。 特に寒冷紗等で鉢全体を覆うと、日照調

整のほかに、食害や病気を媒介する アブラムシやナメクジ等の虫除け効果も期待できます。乾燥にも弱いので、マンションのベランダ等の風通しが良過ぎて乾燥しやすい処では風除けや物陰に置くようにします。

湿気を嫌うので、ジメジメしたところや強い雨の当たるところは避けて、水はけを妨げないように直接地面に置かず、敷石、レンガ、たる木、スノコ等の上に置くようにします。

鉢の高さを高くしてやることで、病気の原因になる泥はねを防ぎ、ウィルス媒介するナメクジ等を寄せ付けない効果も期待できます。



※ヤマユリの幼苗は脆弱なので、必ず目の届く場所に置くことを推奨します

《水遣りについて》



地上発芽 1 年目の幼苗は充分には根が張っていないので、表面が乾いたらたっぷりと水を遣るように心がけます。但し、過湿を極端に嫌いますので、風通しの良い場所に置き、乾いたらやる、乾いたらやる…を心掛けて、但し何時も湿っているような水の与え過ぎは絶対に避けて下さい。特に梅雨時や強い雨の時は、直接雨が当たらない樹木や底の下に置くとか、雨除けシート等を掛けるようにします。

※地上発芽 2 年目以降は、苗が大きくなるに従って根がしっかりしてくるので、水遣りの間隔を徐々に空けるようにします。

《害虫予防と殺菌について》

病気や食害は治せません。予防が唯一の対策です。

アブラムシやナメクジの食害は株を弱らせ、ウィルス等の病気を媒介するので予防が必要です。特にヤマユリの若葉はナメクジの大好物です。春先から梅雨時までの若葉の頃は、オルトランなどの殺虫剤を散布します。（※展着剤の使用推奨）梅雨時などの過湿状態のときは、病気予防としてベンレート、ダコニールなどの殺菌剤を散布し



ます。（オルトランには 根回りに撒く顆粒タイプも有ります）

薬剤使用をなるべく控えたい場合、木酢液などの害虫忌避剤の使用をお薦めします。

※上記の殺虫剤と殺菌剤の水和剤同士は混合使用が可能なので、普段は混合液で散布すると一回の散布で済むので便利です。《希釈割合や混合可能かは、必ず説明書で確認要》

《肥料について》

元来、山野草であるヤマユリに施肥は不要です。自然界では土の中に混ざり込んだ腐葉土などの有機成分が 唯一の栄養分となります。

但し 新赤玉土が土壌内のリン酸分を吸い取り、未完熟の腐葉土が窒素飢餓や発酵ガスを発生させるなど、植物の生育を阻害する可能性があることから、人工的な管理育成の一環として最低限の施肥を行うという考え方もあります。（例：マグアンプ K の小粒を撒く等）

※生育不良等、養分不足などで何等かの栄養分を与えたい場合は、液肥を通常の 2 倍に薄めて(例：ハイポネックスの場合では 4000 倍) 水代わりに施肥します。

《堆肥は雑菌が多く、虫を寄せ付け、病虫害被害の原因となるので絶対に避けます！》

植え替えて、苗を大きく育てる

ヤマユリは根域を制限されると生育が阻害されます。

その為、花を咲かせるまでの大きさの球根*に育てるには、適切な時期の植え替えが必要になります。

*開花球と呼ばれる 重さ 15g 程度、ピンポン玉を一回り小さくした程度の大きさの球根。



◎上の写真は芽出し後、3年目の苗で茎立ちしています。

今年、来年は現状の鉢で育苗を続けても構いませんが、苗（＝球根）を大きくするには植え替えが必要です。

来年の秋（10～11月頃）、地上の葉が枯れたら 現在の2.5倍程度 大きな鉢やプランターに植え替えます。

※古い土の使い回しは**連作障害**の原因になるので、必ず新しい培養土を使用します。

夏以降に一旦 地上部が枯れますが、地中で小球根は生きていますので、球根周囲の湿度を保つために冬期でも水遣りを欠かさないようにします。 来年(地上出芽 2 年目)にはもう少し大きな一枚葉が出芽しますが、出芽苗数は自然淘汰されて 2～3 割減となり、更に翌年にも減少して当初の半数程度になってしまいます。

※今年の秋に 球根は米粒大のラッキョウ形（重さ：0.6～1 g）となり、来年の秋には 2～5 g、3 年目の秋に 10～30 g になりますが、一般に個体差が非常に大きく、特に鉢やプランター栽培では 更に生育が遅くなる傾向があります。

植え替え方法は色々ありますが、簡単で根傷みの少ない方法を紹介します。

《用意するもの》

●前年のポット 4 号鉢よりも、2.5 倍程度以上の大きな鉢やプランター等

※材質は問いませんが、鉢底の穴が大きくて 水はけの良いものを選びます。

（鉢底の穴が 小さい、少ない場合、ドリル等で底に穴を明けて使用します）

●赤玉土小粒 ●完熟腐葉土 ●鉢底石か赤玉土大粒 ●殺菌剤（ベンレート、ダコニールなど）

※植え替えに用いる土は、必ず 無菌の新しい用土を用いるようにします。

《植え替えの手順》

1. 前年使用した古鉢の上土を、球根を傷つけないように注意しながら割りばしや竹へらなどで薄く少しずつ取り除きます。《細いヒゲ根を傷つけないように注意》
鉢を傾けると容易に用土を崩せます。

※鉢の中に小さな球根が出来ているのを確かめます。

（右下の写真、白く見えるのが小球根）



2. 新しい鉢に鉢底石か赤玉土（大粒）を薄く敷き、その上から赤玉土（小粒）3：腐葉土 2 の混合土を、上端から小球根の 3～4 倍 + 1 cm の深さまで入れます。



3. 細根を傷めないように、絡んでいたらそっと離しながら、なるべく根周りの土ごと取り出して、古鉢の2.5倍以上の大きさの新鉢に 頭を上にして小球根間を4cm程度離して下根を拡げて置きます。
4. 小球根の回りのすき間に赤玉土（小粒）3：腐葉土2程度の割合で混ぜた混合用土を充填します。更にその上に覆土として、球根の高さの2～3倍程度の深さで混合用土を被せます。
※ウォータースペースとして、鉢の上部1cm程度は必ず残すようにします。
5. 鉢の上から殺菌剤の水溶液(ベンレート、ダコニールの500倍水溶液)を散布する。



6. 鉢植えの場合、毎年、晩秋の休眠期に徐々に鉢*
を成長に合わせて大きく替えながら、上記の作業を
繰り返し替えて株を大きく育てます。

*菊鉢と呼ばれる、鉢が深くて鉢底がメッシュ状になっている鉢が 排水性・通気性の面から最適です。

《株(球根)の大きさに見合わない大きな鉢は、培養土の無駄使いになります》

※芽出しから3～4年後、茎立ちが15cm以上になったら庭に定植しても大丈夫ですが、**連作を非常に嫌う**ので 過去3年以内にヤマユリを植えていない場所に植えます。

《地上発芽3年目以降のヤマユリ株の植え替えは、別途『ヤマユリ植え替え講習会』資料*を参照してください》

*麻生区ホームページの、麻生ヤマユリ植栽普及会の『ヤマユリ植え替え講習会』紹介ページ上に最新の講習会資料(PDF版)が貼付されていて、ダウンロード出来ます。

【推奨参考図書】

新特産シリーズ ヤマユリ -球根の増殖と花の楽しみ方、自生地復元-

農山漁村文化協会

編著者 小俣虎雄

《主にヤマユリ農家向けに書かれた書籍なので、ヤマユリ愛好家には少し専門的過ぎる内容となっていますが、充実した実践的な記述内容で非常に参考になる書籍です》